

# ウォルトンとセネカ

——釣師と哲人の鱈と徳——

山根 正弘

## はじめに

17世紀イギリスの文人アイザック・ウォルトン (Izaak Walton, 1593-1683) は伝記文学の他、釣りの指南書にその才能を発揮したが、我が国ではむしろ後者の方で名が知られている。今日でも釣り人に敬愛されてやまない『釣魚大全』(*The Compleat Angler*, 1653, 1676) に、ローマ帝政時代初期の哲学者セネカ (Lucius Annaeus Seneca, c. 5 or 4 B.C.—A.D. 65) の話として、死ぬとき色が変わる魚、ボラ (mullet) の例が示されている<sup>1)</sup>。

Your [*sic*] shall read in *Seneca* his natural Questions (*Lib.* 3. *cap.* 17.) that the Ancients were so curious in the newnesse of their Fish, that that seemed not new enough that was not put alive into the guests hands; and he says that to that end they did usually keep them living in glass-bottles in their dining-rooms; and they did glory much in their entertaining of friends to have that Fish taken from under their table alive, that was instantly to be fed upon. And he says, they took great pleasure to see their Mulletts change to several colours, when they were dying. (Izaak Walton, *The Compleat Angler*, Part 1, Chap. 3)<sup>2)</sup>

(セネカの自然研究〔第3巻第17章〕に、古代の人は魚の新鮮さにとても気を遣ったので、生きたまま食客の手に供されないものは新鮮だと思われなかったと

書かれています。そのため普通は食堂のガラスの瓶に魚を生かしておいたとい  
います。友の食客をもてなす際、魚を生きたまま食卓の下から取り出させ、す  
ぐさまご馳走するのを大いに誇りとしたとのこと。ボラが死にかけている  
とき、その色をさまざまに変えるのを見てとても楽しんだともあります。) <sup>3)</sup>

ウォルトンと言えば、一見したところ、田舎の田園風景に埋没し釣り糸を垂らし  
ながら瞑想する姿が想起されるが、彼がなぜ後期ストア派の哲人を登場させ、その  
言葉を引用したのであろうか。素朴で柔和とおぼしき釣り師と変色する魚ボラとの  
関係は如何に。ウォルトンとセネカとの関係を魚のボラを手掛かりにして、両者の  
中核となる考え方のひとつ徳を探るとともに、ウォルトンが古典を引用する際の特  
質を明らかにするのが本稿の目的である。

## I 変色する鰯

セネカは『自然研究』(*Natural Questions*)の意義を俗事から神への考察を導くも  
のと規定し、雷鳴や虹、風、洪水そして地震などの自然現象を取り上げその原因の  
究明に努める。その第3巻は「陸地の水」について詳述されるが、本題に入る前に  
地下の水脈が取り上げられる。なぜかという、地下にも地上で見られるすべての  
ものがあるからという。例えば、地下の暗闇に包まれた空間にモグラやメクラネズ  
ミが暮らしているように、それと同じように地下にも大きな池や湖があり魚が生息  
する。その証拠として、時に地下から魚が掘り出される出来事を挙げる。にわか  
に信じがたい事実の裏付けとして、哲学者の論としてはいくぶん論理的ではないが、  
世の中には贅沢三昧をするのに信じられない愚行が存在するという。つまり寝室の  
中で魚を泳がせ、食卓の下から魚を捕え俎上に載せる当時の現状を示し、その裏付  
けとする。その魚という言葉が契機に脱線して、セネカの奢侈・贅沢非難が始まる。  
その導入部に、ウォルトンによって引用されたボラが登場する。

ボラは宴会客の手の中で死なないかぎり、ほとんど新鮮とはみなされない。こ  
の魚は、ガラスの壺に入れられて運び込まれ、死につく時の色が鑑賞され  
る。息が尽き果てるとき、死がその色をさまざまに変化させる。魚のソースの  
中で生きたまま味つけされ、殺される魚もある。魚が地下でも生きることができ、  
つかまえられるのではなく掘り出されるというのを作り話だと思う人がどこに  
いるだろうか。その人たちが、こんなことを聞いたら、どんなに信じがたいこ  
とだと思うだろう。魚が魚のソースの中で泳いでいるとか、魚が食事ために殺  
されたのではなく、長時間大いに娯楽を提供し、喉よりも前に目を楽しませて  
から食事中に殺された、などという話を聞いたならば。(土屋睦廣訳『自然研究』  
第3巻第17章) <sup>4)</sup>

ここで「ボラ」と訳された語は、ロウブ古典叢書では、“surmullets”と英訳されてい  
る<sup>5)</sup>。現代の生物学上の区分、属と種による同定ではなく、当時魚は外形や習性な  
どによって分類されており、ボラという名で様々な種類が含まれていた。例えば、  
その色から“grey mullet”、獲れる場所から“coast mullet”、食べる餌から“mud  
mullet”と呼ばれた。“surmullet”とは、赤みを帯びた雑食の魚で、ローマ人が特に  
珍重した“red mullet”(アカボラ)のこと。和名でヒメジ(比売知)を当てることも  
ある。

セネカの余談は止まらず次章でも食道楽批判が続く。彼らグルメの狂態はボラが  
死ぬときの様子をじっくりと眺める冷酷さにあり、その冷酷さを強調するため、ボ  
ラの変色の過程がさらに詳しく描かれる。

少しの間、本題を脇に置いて、贅沢を戒めることを許してくれたまえ。君は言う。  
「死につくボラのあの姿ほど美しいものはない。命が絶えんとするボラは、  
まさにのたうちまわることで、まずは赤く、次には青白く染まり、鱗がさまざま  
な色に変わる。定まらぬ外観を呈しながら、生と死の間を色がさまよう。」(中略)  
かつてはこういう言葉を聞いたものだ。「岩間に棲むボラほどよいものはない。」  
だが今ではこういう言葉を聞く。「死んでいくボラほど美しいものはない。私の

手にガラス器をくれ。その中でボラが飛び跳ねたりぴくぴくしたりするのが見えるように。」十分に長い間賞賛されたところで、ボラは透明な水槽から引き揚げられる。(『自然研究』第3巻第18章)<sup>6)</sup>

古代ローマのグルメ・ブーム批判の一端として、上記の他、そこのけそこのけ魚が通ると言わんばかりに大声を上げ、人をも蹴散らせ魚を運ぶ飛脚の傍若無人な態度とか、朝に水揚げしたばかりの魚の鮮度に飽きたらず目の前で絞めなければ新鮮さを信じないと言い張る美食家の疑り深さなどが示される。だが、食道楽批判の目玉は、なんといってもボラの生き殺しの様を垂涎して眺める金持ちである。セネカは、水を得た魚のように非難の矛先は鋭い。

種々雑多なものに通じていた古代ローマの博物学者プリニウス (Pliny the Elder, Gaius Plinius Secundus, A.D. 23-79) も、死にゆくボラの変色を繰り返す。

The leaders in gastronomy say that a dying mullet shows a large variety of changing colours, turning pale with a complicated modification of blushing scales, at all events if it is looked at when contained in a glass bowl. Marcus Apicius, who had a natural gift for every ingenuity of luxury, thought it specially desirable for mullets to be killed in a sauce made of companions, garum—for this thing also has procured a designation—and for fish-paste to be devised out of their liver. (Pliny, *Natural History*, Bk. 9, Chap. 30)<sup>7)</sup>

(美食の先達が言うには、死に行くボラは種々様々にその色を変えるという。とにかく、ガラスの器に入れて眺めると、赤みを帯びた鱗を複雑微妙に変えながら青白くなる。マルクス・アピキウスは、贅沢を享受する天賦の才にあらゆる点で恵まれていたが、ボラは同じ魚類で作ったソース、ガラムに漬けて殺し——というのも、これにもある名前が付けられていたが——そしてその魚の肝からペーストを作るのが特に好ましいと考えていた。)

プリニウスではボラの調理法にまで話が及び、口腹の悦びが程度を増している。な

お、アピキウスはティベリウス帝時代の大富豪で、食べ物には糸目をつけられない稀代の美食家である<sup>8)</sup>。

ところで16世紀フランスのモラリスト、モンテーニュ (Michel Montaigne, 1533-1592) の随想録には、いたる所に古典の引用が鑲められている。古典といっても、ギリシアは少なく圧倒的にローマの著作が多い。そのなかでも特にお気に入り、プルタルコスとセネカである。『エッセー』(*Essays*, 1580) にふたりを弁護する一章 (第2巻第32章) を設けているくらいである。そのモンテーニュは「昔の習慣について」で、変色するボラこそ出てこないが、セネカなどの古典を踏まえて特異な風習を伝えている。

夏にはしばしば、下の広間に、冷たい澄んだ水を流した溝を通し、その底に、たくさん生きた魚を泳がせた。客はめいめい好きなを手づかみにし、自分の好みどおりに料理させた。魚はいまでもそうだが、昔から、常に、高貴の人々に自分で調理法を覚えようという気を起こさせる特権を持っている。その味は獣肉よりもはるかにうまい。少なくとも私にはそうだ。(『エッセー』原二郎訳、第1巻第49章)<sup>9)</sup>

話をウォルトンに戻すと、セネカのボラが引用される『釣魚大全』第1部第3章で、釣り師は道すがら得た獵師の弟子に川魚チャブ (コイ科) の釣り方と調理法を伝授する。弟子によるとチャブは不味い魚である。師匠が云うには、魚は新鮮さが命。チャブも釣り上げたらすぐに調理しなければならない。死んで1日経過したら比較にならない、と弟子の固定観念の打破に努める。さらに、古の巨人の肩に乗って、つまり哲人セネカの言葉(『自然研究』)を示し、己の説を裏書きする訳である。だが、セネカは享楽主義の輩が追求める魚の新鮮さを否とした。その上で変色するボラを象徴として提示した。それに引き替え、ウォルトンの引用は、元の文脈を無視した形で、つまり魚の新鮮さを推奨するのに例示され自己撞着となっている。けれど獵師の弟子は、すでに師匠によって素早く適切に料理されたチャブをご馳走になり目から鱗が剥がれる経験をしており、ウォルトンの説を鵜呑みにする。

スタッフォードのパブあるいは居酒屋の息子として産声を上げたウォルトンは、教区教会付属のグラマー・スクールで古典教育を受けた痕跡がなく、また現存する蔵書にラテン語の書物が1冊しか含まれておらず、ウォルトンがセネカをラテン語で読んだ可能性は低い<sup>10)</sup>。ウォルトンが典拠としたセネカはラテン語のテキストではなく、同じ宗旨の英国国教会の聖職者ジョージ・ヘイクウィル (George Hakewill, bap. 1578, d. 1649) が英語の散文で記した『弁明』 (*An Apologie of the power and providence of God in the Government of the World*, 1627, 1635) である<sup>11)</sup>。たとえ原文の文脈が軽視されたとしても、ウォルトンはセネカの意を得た翻案を自在に操り、登場人物とともに読者を巧みに説得する術を心得ているといえる。それは、彼が得意とした伝記集で聖人伝を作り上げる過程で使用された、ある意味で「騙しのテクニック」である<sup>12)</sup>。

## II 変貌する鱈

ウォルトンは釣りの素晴らしさを説くにあたり、その釣果である魚がイギリス人の食生活に相応しいという。なぜかという、四旬節や金曜日に魚を食べることはキリストの受難を想いその宗旨に適う行為であり、イギリス人に特有な「瘡」(断続的に痙攣を伴う病)の対処法は野菜と魚を中心に食餌を摂ることであるから、と説明を加える。さらに、魚食は古代ローマより続く由緒正しい饗宴のやり方であるという。

The Romans in the height of their glory have made Fish the mistress of all their entertainments; they have had Music to usher in their *Sturgeon*, *Lampreys*, and *Mullet*, which they would purchase at rates rather to be wondered than believed. (Walton, p. 187)

(栄華の極みにあったときのローマ人は、魚をもてなしの華にし、チョウザメやヤツメウナギそれにボラを宴会場に運び入れる際、音楽を奏でた。これらの魚

を買うのに、信じられないほどの代金を払ったといいます。)

奢侈を咎めたセネカの言葉に耳を傾けてみると、先に登場した快楽を享受するアピキウスなどは山海の珍味を食卓に並べ賞味するとして、

山と敷き詰めた薔薇の寝台に寝そべりながら珍味佳肴を見下ろし、楽の音で耳を、余興で目を、美味で舌を楽しませている・・・(セネカ『幸福な生について』大西英文訳、第11章第4節)<sup>13)</sup>

古代ローマでは、異常なほど魚が、特にアカボラが珍重された。ある宴に招かれた食客たちが料理を楽しみながら、食材や料理法あるいは食べ方について様々に蘊蓄を傾ける対話編を著したアテナイオスは、魚の値段が高騰する現状を、アルケデイコスの『宝物』を引用して示す。次の台詞は、自ら買い出しに行った料理人の歎き節である。

はぜが三ドラクマで・・・・・・

穴子の頭とそのすぐ下の切り身が、あわせて

また五ドラクマ。ああ、みじめな暮らしよ、だ。(中略)

これだけのものを、これほどの値で買うとはな。

本当にいいものを買えば、こっちは破産間違いなし。

(『食卓の賢人たち』柳沼重剛訳、第7巻)<sup>14)</sup>

ドラクマは古代ギリシアの銀貨。

皇帝ネロの時代「趣味の審判者」であったペトロニウス (Petronius Arbiter, d. A.D. 65) による風刺的悪漢小説『サテュリコン』 (*Satyricon*) で有名な箇所「トリマルキオの饗宴」 (Banquet of Trimalcio) は、その時代の逸楽そして飽食の象徴である。主餐の出し物のひとつ「黄道十二宮尽くし」で、双魚宮の代表として2尾のアカボラが食卓を飾る<sup>15)</sup>。

ボラ、特にアカボラが高額で取引される話が、食通を痛罵したセネカにある。セネカの倫理書簡集によると、幸福な生に必要とされるものは、根本的な原理と実生活上の教訓の両方であると規定される。さらに、個別の教訓は、手本となる人物の性格や事績を語る中で示されると考える。道楽者が贅を尽くした宴会のために破産した事例を示し、いわば反面教師として教訓となす。

巨大なボラがティベリウス帝に献ぜられた。——その重さを言い添えてどなたかの食欲をそそらずにおられようか。四リーブラ半の重さだったという——。帝はそれを市場に送って売るように命じて、こう言った、「諸君、私の推測がまったくの的外れでなければ、まず間違いなく、そのボラはアピキウスかプブリウス・オクターウィウスが買うだろう」と。帝の推測は予想を越える形での中した。彼らは入札を行い、オクターウィウスが勝って、その仲間内で大きな名誉を獲得したが、それというのも、彼は皇帝が売りに出し、アピキウスでさえ買うのをあきらめたその魚を五〇〇〇セステルティウスもの値をつけて買い取ったからだ。(大芝芳弘訳『倫理書簡集』第15巻第95書簡)<sup>16)</sup>

とにかく巨大なボラだったようで、その重さは、1リーブラが約327グラムなので、1.5キログラムくらいの重さである。当時、騎士階級に属する者の最低資産が40万セステルティウスであったというから、たった1尾のボラにその80分の1を費やしたことになる<sup>17)</sup>。セステルティウスは真鍮貨。

ブリニウスも、以前は馬1頭よりも料理人ひとりの方が高額で雇われたことも驚きだが、現在では馬3頭よりも高額で、三人の料理人より1尾の魚の方が高額であると苦言を呈している。(『博物誌』第9巻67-68節)<sup>18)</sup>

ウォルトンは猟師や鷹匠が追い求める立派な陸上の動物や大空を舞う鳥類と同じように、海や川にも素晴らしい魚類がいると説明を続ける。例えばキジバトは夫婦愛の象徴として知られるが、水中にもそれに劣らず連れ合いを大切にす魚ボラを例として、フランスの詩人デュ・バルタス (Du Bartas, 1544-1590) の詩を借用する。

*But for chaste love the Mullet hath no peer;  
For, if the fisher hath surpriz'd her pheer,  
As mad with wo, to shore she followeth,  
Prest to consort him, both in life and death.* (Walton, p. 199)  
(だが、貞節な愛にかけてはボラに敵うものはない。  
というのも、漁師がその連れ合いを捕らえたなら  
悲しみで気が狂い、岸まで後を追う、  
生死にかかわらず添い遂げる覚悟ができているから。)

デュ・バルタスの典拠は2世紀後半マルクス・アウレリウス帝政時代に活躍したオッピアノス (Oppianos, or Oppian of Cilicia) の教訓叙事詩『漁夫訓』(*Halieutica*) である<sup>19)</sup>。

かくの如き災厄を色恋は、さらにケパロス [ボラ] に与える。  
というのもこの連中も波間に曳かれる雌にまんまと騙されるからで  
彼女はぴちぴちして、豊満なからだつきをしている方がよろしい。  
すなわち、彼女を目にすれば、かれらは無数に集まってくること請け合い。  
(伊藤照夫訳『漁夫訓』第4巻)<sup>20)</sup>

「ケパロス」とカタカナで和訳された魚は、アリストテレスでは、頭が大きいことから「アタマボラ」と称される。(『動物誌』第8巻第2章)<sup>21)</sup> いずれにしても、ボラの一種であることに違いはない。

かくしてボラの雄は雌の色香に惑わされ、漁夫に一網打尽にされる。デュ・バルタスの説く貞節とも夫婦愛とも無関係である。ところで、罟を使った漁の仕方は、アリストテレスに由来する逸話である。魚類の交尾について叙述した箇所、フェニキア地方で行なわれるボラの習性を利用した漁法を挙げる。「雄のボラをおとりにして引きまわし、雌を集めて網をかけ、また雌を使って雄を捕えるのである。」(『動物誌』第5巻第5章)<sup>22)</sup> だが、ウォルトンはギリシア・ラテンの原典に拠らず借用



したので、囃の話が夫婦愛に変わっても違和感がなかったのであろう。デュ・バルタスの『第1週、あるいは、天地の創造』(*La Sepmaine; ou, Creation du monde*, 1578)の英訳は、17世紀の初頭にジョシュア・シルヴェスター (Joshua Sylvester, 1563-1618) により『デュ・バルタスの聖週と御業』(*Du Bartas his Divine weekes and works*) のタイトルで出版された。ボラの話は第1週の5日目に現れる<sup>23)</sup>。

ウォルトンは釣りの総論を開陳したあと、個々の魚について各論を展開していく。第1部の第4章ではマスを取り上げ、その習性や釣り方を伝授するが、その前にマスの美味を褒め称えるのに、ボラを引合いに出す。博物学の権威コンラッド・ゲスナーの説として、「マスの味が優れていることにかけては、ボラが海の魚すべてを向こうに回しても引けを取らないのと同様、淡水のどの魚にも負けない」(“he [Trout] may justly contend with all fresh-water-Fish, as the Mullet may with all Sea-Fish for precedency and daintiness of taste. . .” Walton, p. 224) と。おそらく、ゲスナーはボラといっても、ローマ人が珍重したアカボラを念頭に置いていたと思われる。だが、ウォルトンには同じ属の中の種の区別は無いらしい。このあとサセックス州自慢の魚介類を列挙する件があるが、その中にアランデルのボラが挙げられる。このボラは、グレイ・マレット (“grey mullet”) である。アランデルのボラは、よほどウォルトンのお気に入りらしく繰り返し登場する。

. . . In England, Lincolnshire boasteth to have the biggest [pike]. Just so doth Sussex boast of four sorts of fish; namely an Arundel Mullet, a Chichester Lobster, a Shelsey Cockle, and an Amerly Trout. (Walton, p. 291)

(イギリスでは、リンカーンシアが最大の川カマスを産することを誇っている。それとまったく同じように、サセックスは4種類の魚介類、つまりアランデルのボラ、チチェスターのロブスター、シェルシーのザルガイ〔鳥貝の類〕それにアマリーのマスを誇っている。)

現在でもアランデルはこの魚が有名で、地元の人々をボラと呼ぶ。なお、この故郷自慢は、20世紀半ばに編纂された『16世紀と17世紀におけるイギリスの諺辞典』で

ロブスターの項 (L404) に収録されている<sup>24)</sup>。

### III モンテーニュの猫

『釣魚大全』の冒頭。さわやかな皐月晴れの朝、見知らぬ3人がたまたま同じ方角に足を運ぶ。楽しい道連れを求め会話を始める。当初、それぞれの素性は不明であったが、その内のひとりがカワウソ狩りに行く途上であることから、狩猟をする人物であると判明。するとそれをきっかけに、もうひとりが鷹匠、残るひとりが釣り師と素性を明かす。獵師と鷹匠は釣り師と聞いて、それぞれの仲間が釣り師のことを、退屈な余興に忍耐できる素朴な者と嘲笑するのが常である、と揶揄する。やんわりと愚弄された釣り師は、努めて心穏やかに、そしてもの静かにその技法と楽しみを擁護する。狩猟や鷹狩そして魚釣り、そのどちらの余興がすばらしいと簡単に決められないこと、他人を嘲笑する者が実は愚弄の対象となることを示すのに、モンテーニュを後ろ盾にする。

. . . as the learned and ingenuous Montaigne says like himself freely, *When my cat and I entertain each other with mutual apish tricks (as playing with a garter) who knows but that I make my Cat more sport than she makes me? shall I conclude her to be simple, that has her time to begin or refuse to play as freely as I my self have? Nay, who knowes but that it is a defect of my understanding her language (for doubtless Cats talk and reason with one another) that we agree no better: and who knows but that she pitties me for being no wiser, than to play with her, and laughs and censures my follie for making sport for her when we two play together.* (Walton, p. 177)

(学識が豊かで率直なあのモンテーニュが、いかにも彼らしく、菌に衣を着せずに言っています。「猫と私が、〔靴下止めなどで遊ぶといったような〕たわいもない騙し合いで楽しむとき、私が猫を相手に楽しんでいるというより、猫が

私を相手に楽しんでいるかもしれないのです。猫をバカだとして言い切れるでしょうか。猫の方でも好きなときに遊びを始めたり、止めたりするのですから。[たしかに猫どうして話をし、相手の思いを推し量っているのですから]猫と私が解り合えないのは、私が猫の言葉を理解できないという落ち度によるものでないと言い切れるでしょうか。また、我々が一緒に遊んでいるとき、猫と遊ぶ程度の頭の持ち主と私を憐れみ、猫をじゃらす愚かさを笑い、答めているかもしれないのです。』)

モンテーニュの数ある随想の中でも格段に長い「レーモン・スポンの弁護」。人間の無力さを説くとともに、「私は何を知っているのか」と開陳する章である。思い上がりは人間の生まれつきの病気で、被造物すべての中で一番脆いものは人間ではないのか。自分の仲間である動物たちより、如何にして優っているのか。動物の隠れた力や知性を知り得ようかと問うたあと、主客逆転の発想として有名な「猫の話」に移る。

Comment cognoist il par l'effort de son intelligence, les branles internes et secrets des animaux? par quelle comparaison d'eux a nous conclud il la bestise qu'il leur attribue? Quand je me joue a ma chatte, qui scait, si elle passe son temps de moy plus que je ne fay d'elle? Nous nous entretenons de singeries reciproques. Si j'ay mon heure de commencer ou de refuser, aussi a elle la sienne. (*Les Essais*, II, xii) <sup>25)</sup>

(いったい、彼[人]はどのように知性を働かせて、動物たちの内部の隠れた動きを知るのだろうか。彼ら[動物]とわれわれをどのように比較して、彼らを愚鈍であるとするのだろうか。私が猫と戯れているとき、ひょっとすると猫のほうが、私を相手に遊んでいるのではないだろうか。[私が遊びを始めたり止めたりできるように、猫にもできる。])(モンテーニュ『エッセー』第2巻第12章) <sup>26)</sup>

17世紀の初めに出版されシェイクスピアも参照したジョン・フローリオによる英訳

では、

How knoweth he by the vertue of his understanding the inward and secret motions of beasts? By what comparison from them to us doth he conclude the brutishnesse, he ascribeth unto them? When I am playing with my Cat, who knowes whether she have more sport in dallying with me, than I have in gaming with her? We entertaine one another with mutuall apish trickes, If I have my houre to begin or to refuse, so hath she hers. (*Montaigne's Essays*, Bk. 2, Chap. 12) <sup>27)</sup>

となっている。ウォルトンとフローリオ訳を較べてみると、「たわいもない騙し合いで」(“with mutual apish tricks”)の語句などが共通しており、現存するウォルトンの蔵書にフローリオ訳の写しがあることから、フローリオ訳を参照したのではないかと思われる。ちなみに、『釣魚大全』は1653年に初版が出版されたあと、第2版、第3版と次々と改訂版が現れる。存命中の決定版である第5版(1676年)には、大きな変化がある。例えば、分量的にも初版のほぼ倍にもなるが、それにとどまらず別の著者による続編、チャールズ・コットン(Charles Cotton, 1630-1687)による第2部と合冊される。第2部はフライ・フィッシングの実践的な記述が中心であるが、その著者コットンはモンテーニュの『エッセー』の翻訳者として名高い。その当該の箇所を較べてみると、

How does he know, by the strength of his understanding, the secret and internal motions of animals? and from what comparison betwixt them and us does he conclude the stupidity he attributes to them? When I play with my cat, who knows whether I do not make her more sport than she makes me? we mutually divert one another with our monkey tricks; if I have my hour to begin or to refuse, she also has hers. (*Essays*, II. 12) <sup>28)</sup>

となる。ウォルトンとフローリオ訳で共通していた語句「たわいもない騙し合いで」(“de singeries reciproques” / “with mutual apish tricks”) は、“mutually. . . with our monkey tricks”と英訳される。仏語“singeries”は“sing” (猿) の派生語で「詐欺、ペテン、悪ふざけ」を、“reciproques”は「互いの」を、それぞれ意味する。この語句の相違を見る限り、ウォルトンはコットン訳ではなく、やはりフローリオ訳を参照したものと思われる。しかも、コットン訳が出版されたのは1685年で、ウォルトンとコットンの師弟関係を考慮したとしても、ウォルトンがコットン訳を参照した可能性は低い。ただ、ここで興味深い事実は、モンテーニュの原文やフローリオ訳にも見出せないウォルトンによる具体的な玩具、猫だましの挿入である。英語の“tricks”には、玩具の意味がある。(OED, sb. I. 6. b) もしウォルトンが猫を飼っており、たわいもない玩具でじゃらした経験から、疑似餌に「靴下止め」を用い釣り糸を垂らして魚ならず猫を釣り上げて楽しんでたと想像すると、日常生活の微笑ましい一齣を垣間見た感じがする。

話を戻すと、モンテーニュが世紀の変わり目に抱いた懐疑、キリスト教徒でありながら神をも含め信じられるものがこの世にあるのかとの懐疑、それにより彼を悩まし続けた憂鬱と絶望は、たとえ日常の些細な猫との戯れが例示されていようと、一市民の人生だけではなく当時の世界観をも揺るがすほど深刻で、イギリスではシェイクスピアの4大悲劇、特にハムレットの人物形成に多大な影響を及ぼしたとされる<sup>29)</sup>。それに引き替えウォルトンの援用は、釣り師の弁護の為であるとはいえ、嘲笑する者とされる者、主体と客体の不安定入れ替えという点では類似しているが、モンテーニュの深刻さには遠く及ばず、イギリスの田園風景に移植された徒花となっている。

#### IV 徳はそれ自体報酬

セネカにとり幸福な生とは何か。『幸福な生について』(On the Happy Life) の冒頭、セネカが注意を促したことは、幸福を追い求める人生の旅にあっては、最も踏

みならされ、最も往来の激しい道こそ、最も人を欺く道であり、羊と同じように多数のあとを追うことが大きな害悪となる、ということであった。逃げた羊を追いかける際、行く手が多岐にわたり呆然とする「亡羊の嘆」にならぬため、真偽を識別する心眼を備えたと自負するセネカが指し示す道は、「精神が自由にして実直、何ものにも怯まず、何事にも揺るぎなく、恐れや欲望の埒外にあり、名誉あるものを唯一の善、恥ずべきものを唯一の悪とみなす」ことであった。そのような徳を備えた人物は、「外的なものに毀損されず、征服され」ることはなく、「禍福いずれにも心構え」ができていう。(第8章第3節)<sup>30)</sup> つまり、徳こそが幸福な生に必須の条件であると説く。

それに続く第9章では、徳を求めて報酬や対価が得られるため徳を追及するのではないか、つまり他人から褒められ報奨を得られるから善い行いをするのではないかと他派から予期される反駁に機先を制する。田畑で農作物を育てる際、畔で色とりどりの花が咲くことがある。花は偶然の産物で、あくまでも作物が主目的である。それと同じで、名誉という快樂が時に付随することもあるが、あくまでも目指す主体は美徳であるという。

徳から何を徳たいのか、と尋ねるのか。徳そのものである。徳は徳以上に善きものを有さず、徳それ自体が徳の対価なのである<sup>31)</sup>。

Interrogas, quid petam ex virtute? Ipsam. Nihil enim habet melius, ipsa pretium sui. (De Vita Beata, IX, 4)<sup>32)</sup>

Do you ask what it is that I seek in virtue? Only herself. For she offers nothing better—she herself is her own reward.

セネカのいわば「徳はそれ自体報酬」は、『倫理書簡集』や『恩恵について』にも見られ、哲人の終始一貫した考え方のような。例えば、『恩恵について』では、「確かな報いの見込みがないからこそ、恩恵を施すことは美徳なのだ」(第1巻第1章第12-13節)、「高潔な行為の報酬は、その行い自体の中にある」(第4巻第1章第3節)、「道徳的に立派な行為をなそうと努めるとき、それはただそのこと自体のためであって、



ほかの理由はない」(第4巻第9章第3節)、「行為の最大の報酬はそれをなすこと自体にあり・・・」(第4巻第22第1節)と繰り返し、無報酬の徳、徳のための徳を強調する<sup>33)</sup>。つまり、損得勘定の徳は徳ではないという。

紀元68年に執政官を務めたシリウス・イタリクス (Silius Italicus, 26-101) が隠居してカンパニアで余生を過ごしながら綴った長編叙事詩『ポエニ戦記』(*Punica*)にも、「徳はそれ自体報酬」という考え方が現れる。第二次ポエニ戦争の最中、スペインで大スキピオの父親と伯父がカルタゴ軍との戦闘で討ち死にする。スピキオは、相次ぐ身内の死で戦意を喪失。黄泉の国へとふたりに会いに行く。クマエの巫女を導き手に冥府に降ると、産褥で死んだ母親が現れスピキオ出生の秘密が明かされる。ジュピターが蛇の姿を借りて交わったという。だから、息子よ、如何なる戦闘も恐れる必要はない。大神が味方してくれるでしょうから、と。その後、所期のふたりの亡霊が現れスピキオが口火を切る、息子の私が代わりに死ねばよかった。ローマ全体が大黒柱を失い、死を悼んでいます。元老院はふたりの武勲を称え、記念碑となる墓を建設中です、と。父は息子の言葉を遮り、「徳はそれ自体、最高の報酬である」(“*ipsa quidem virtus sibimet pulcherrima merces / Virtue is indeed its own noblest reward*”)と原理原則を披瀝する<sup>34)</sup>。だが、続けて、死者というものは生前の名声が生者の間で思い起こされ、忘却の怪物が自分たちに向けられた称賛を飲み干すのでなければ甘美なものであると思う、と俗物的な考えを付け足す。死者とのやり取りのあと、結局、スキピオがこの世に戻り陣列に復帰する決意を固めるのは、クマエの巫女の預言である。カルタゴの名将ハンニバルは妻子に見捨てられ、追放の憂き目にあい、自害する末路を辿るというものであった。

紀元400年前後ホノリウス帝政時代、神話を題材にした未完の叙事詩『プロセルピナの掠奪』で知られ、後世の文学研究者にはラテン詩における古典の伝統を体現する最後の詩人と呼ばれるクラウディス・クラウディアヌス (Claudius Claudianus, or Claudian) は、眷顧者への賛辞やその敵対者を貶める弾劾を数多く著したが、そのひとつ「マンリウス・テオドルスの執政官職を讃える頌詩」(“*Panegyric on the Consulship of Manlius / Mallius Theodorus*”) で本文の劈頭、「徳はそれ自体報酬」(“*Ipsa quidem Virtus pretium sibi.*” / “*Virtue is [indeed] its own reward.*”) を繰り返す<sup>35)</sup>。

返す<sup>35)</sup>。

モンテーニュも「徳はそれ自体報酬」を、古典の伝統を受け継ぎ、つまりセネカの書簡を引いて示す。真の榮譽は神に属するものであり、人間が手にする榮譽は虚しく実体のない影のようなものである。なぜかという、人に与えられる榮譽は望む万人の手中には収まらず偶然の賜物であり、人はより本質的なもの、すなわち徳を追求すべきであるからと言い、続けて「徳はそれ自身があまりにも高貴であるから、それ自身の価値以外に何の報いも求めない」(「榮譽について」[第2巻第16章]) とその段落を結ぶ<sup>36)</sup>。ちなみに、モンテーニュが引用したセネカの書簡とは第81倫理書簡で、恩恵について論じたものである。セネカが云うには、恩恵は報われなくても与え続けなさい。もし与えられたら感謝の念を表すのを忘れないように。そして、謝意を表すのにあらゆることをしなさい。なぜかという、感謝は自身に返ってくるからという。それは、情けは他人の為ならずという意味ではなくて、「あらゆる美德の代価は、それ自身の内にあるからだ。実際、美德を实践するのは報酬を求めるわけではない。正しい行いに対する賃金は、それを行ったこと自体だ」と、無報酬の美德を讃える<sup>37)</sup>。

17世紀イギリスのトマス・ブラウン (Sir Thomas Browne, 1605-1682) は、無神論者と見なされることの多い医者として、国教徒の信条を理性的に語る。その著『医者者の宗教』(*Religio Medici*, 1642) において、ストア派の始祖ゼノンやその信奉者の考え方にも素晴らしく立派な教義があり、教会の説教壇で語れば当代のキリスト教神学として通用するものがあると認める。そのブラウンだが、後期ストア派のセネカが説く「徳こそ徳の報酬」(“*Ipsa sui pretium virtus sibi—that virtue is her own reward,*” Part 1, Sec. 47) は彼にとっても当初は冷徹な原理と映った<sup>38)</sup>。というのも、キリスト教徒は最終審判を心に留めているから、暗闇であろうとだれが見ていなくとも徳のために徳を為すことができるのであり、セネカのように超然と高潔でいられないと認める。しかも、ブラウンにとり魂の不滅を否定する「セネカの三行」(“*three lines of Seneca,*” Part 1, Sec. 21)<sup>39)</sup> は無神論へと導く毒薬であり、セネカのように天国と地獄を想わなくとも報酬を得ずに徳に仕えることができるだろうか、あるいはキリスト教徒として最終審判のときに報われなかったら善行を積めるだろうか

と思ひ悩む。ブラウンを評価するお偉方の面前で徳の実践を試みるとともに、寢床に引き下がりひとり静かに想像力を働かせるに、不公平や偏向がすべて解消される最終審判のとき「復活」があるからこそ、彼は何ら見返りもなく他人のために尽くせるという考えに至る。ブラウンは別の箇所（第1部第14節）で、森羅万象のすべてに目的因があると明言しており、彼には復活こそが美徳の目的といえるのだろう。片方の足をストア派に置きながらも、もう一方の主軸は国教会に据えるという、二律背反する曖昧な決着のつけ方をするブラウンだが、その信仰表明にセネカの説く倫理の粋が援用される。

何の見返りなく善行を積む、徳のための徳、無報酬の美徳、というのは普遍的な考え方であり、セネカが起源であると断言することはできないが、おそらく文章化されたもののなかで最も古いもののひとつであると思われる。人類共通の考え方は、現れては消え別の時代に復活し、いつしか格言や俚諺となるのは常である。トマス・ブラウンが云うには、異教的な考え方はその考案者とともに死滅するのではなく、アレトウーサの川のごとく、ある場所で流れを失っても別の場所で再び流れが甦ると。（『医者宗教』第1部第6節）アレトウーサとは、水源はギリシア本土にあり、そこから川の流れが海底を潜りシシリーまでたどり着きシラクサのオルテュギア島で湧き出ると考えられている泉のことである。伝説上も有名だが、現在でも、湾内の泉から真水が湧くという<sup>40)</sup>。ウォルトンが云うには、サリー州にあるモール川は、数マイル地表を流れたあと丘に遮られて地下に潜り、はるか離れたところで再び姿を現すと。（『釣魚大全』第1部第1章）モールとは哺乳類のモグラのことで、名が体を表す命名となっている。「徳はそれ自体報酬」およびそれに類似する表現は、シェイクスピアやスペンサーなどによって劇や詩の中に鑲められ、17世紀イギリスでは諺化していた<sup>41)</sup>。

The service and the loyalty I owe,

In doing it, pays itself. (*Macbeth*, I. iv. 22-23) <sup>42)</sup>

（私が負う忠義のご奉公は、／行なうことが支払うことになります。）

Your vertue self her owne reward shall breed. . . (*The Faerie Queene*, III. xii. 39) <sup>43)</sup>

（あなたの美徳自体がそれ自身の報酬を生む・・・）

ウォルトンの『釣魚大全』には、閑話休題や話の要所を締めくくるのに様々な詩が引用される。ウォルトンと同じ年に生まれた国教会の牧師で詩人のジョージ・ハーバート (George Herbert, 1593-1633) では、「摂理」の1節と「徳」の全編とがウォルトンの散文の間に置かれる。「徳」はハーバートの詩集『聖堂』 (*The Temple*, 1633) の数ある詩の中でも珠玉の短編で、この世が灰燼に帰するとも徳高き人は不滅であると、徳を讃えたものだ。本稿の冒頭で触れたように、ウォルトンには伝記作家としての一面がある。その『伝記集』 (*Lives*, 1675) に、ハーバートの生涯が含まれている。ウォルトンがハーバートの伝記を締めくくる言葉は、「彼はこのように暮らし、このように聖人として息を引き取った。この世の汚辱に染まることなく、慈善活動に勤しみ、傲り高ぶることなく、しかも徳高き生のあらゆる手本として・・・」であった<sup>44)</sup>。ウォルトンに徳の模範とうたわれるハーバートが自分の実体験を基に記した一種のマニュアル本『田舎牧師』 (*The Country Parson*, 1652) に、理想としての「徳のための徳」が説かれる。

For though he desire, that all should live well, and virtuously, not for any reward of his, but for vertues sake; yet that will not be so: and therefore as God, although we should love him onely for his sake, yet out of his infinite pity hath set forth heaven for a reward to draw men to Piety, and is content, if at least so, they will become good: So the Countrey Parson, who is a diligent observer, and tracker of Gods wayes, sets up as many encouragements to goodnesse as he can, both in honour, and profit, and fame; that he may, if not the best way, yet any way, make his Parish good. (Chap. XI: "The Parson's Courtesie") <sup>45)</sup>

（牧師から見返りを得るためではなく、徳のために、教区民はすべて善良にして

徳高く暮らすべきだと田舎牧師は願う。けれど、現実にはそうならない。したがって、我々人間はただ神を神であるが故に愛すべきだが、神の方はその無限の憐れみから人間を信仰に導く見返りとして、天国を設定なされた。すくなくともそうすることで、人間が善行を積むのであれば、満足される。そのように、田舎牧師も神の道を熱心に遵守し歩む者であり、名誉や名声そして利得において、善行が奨励されるものをできる限り多く設ける。それが最善の方法でなくとも、とにかく担当の教区をよくすることができるようにと。)

田舎牧師は教区民を牧師館に招き一緒に会食をするようにと、ハーバートは奨める。順番に全員を招くのが原則だが、貧窮者には困っているものを入手できるように現金を手渡し、特に裕福な者を饗応すれば、そうでない者が憧れから善行を積むのではないかと考えるからだ。理想としては、見返りを求めるのではなく、ただ「徳のため」の善行である。だが、田舎の担当教区では、教区民との会食が天国の代替となるとの考えだ。上流階級の子弟として、いわば身を落として聖職者となったハーバートの決議論的な妥協の産物といえる<sup>46)</sup>。

だが『釣魚大全』になると、セネカの「徳はそれ自体報酬」に関して、モンテーニュやトマス・ブラウンそれにハーバートと較べて、ウォルトンの引用の仕方はかなり違ってくる。先に触れたように、獵師と鷹匠に揶揄された釣師は、釣りと徳を愛する者すべてのために、その技法の素晴らしさを弁護する。

... doubt not therefore, Sir, but that *Angling* is an Art, and an Art worth your learning. . . *Angling* is somewhat like *Poetry*, men are to be born so. . . but having once got and practis'd it, then doubt not but that *Angling* will prove to be so pleasant, that it will prove to be like *Vertue, a reward to it self*. (Walton, p. 66)

(したがって、釣りが技法であること、学ぶに値する技法であることを疑ってはなりません。[中略] 釣りはいくぶん詩に似ていて、人はそのように生まれついていなければなりません。[中略] しかし、いったんこの技法を習得し、修練を

積みめば、釣りはとても愉快なもので、徳と同じように、それ自体が報酬となること疑いがありません。)

通常、人が釣りを行なうのは、主に釣果を求めてのことである。だが、ウォルトンは田園を流れる川辺で瞑想することが目的で、釣果が副産物であると言う。その割には、釣った川魚を美味しくいただく料理法は詳しく、紙面に口腹の悦びという快楽が充満しているようにも見えるのだが、それはともかく、釣師はこのように獵師と鷹匠を説得にかかり、人生を如何に幸福に生きるかというセネカの真摯な態度や、自身の信仰を如何に理性に照らして貫くかというブラウンの苦渋の選択とは無縁な文脈で、あるいはまたハーバートのように理想を念頭に置きながらも現実に妥協せざるを得ないジレンマを感じさせることもなく、ウォルトンは座談の名手よろしく、使い古された俚諺をその場を和ませる潤滑油として用いる。

## むすび

古代ローマの哲学界の巨星セネカ、彼は皇帝ネロの師であり政治家で、しかも悲劇作家でもあった。このような大物と、釣りのバイブルとまでうたわれる『釣魚大全』の著者ウォルトン、このふたりの連関を変色する魚ボラを手掛かりに、「徳はそれ自体報酬」の変遷を辿るとともに、ウォルトンの古典の引用の仕方を見てきた。その結果、17世紀イギリスのウォルトンの中に、モンテーニュなどのフィルターを通してだが、細部に宿るセネカの残滓を見ることができた。また、ウォルトンは古典の翻訳や翻案を、時には元の文脈を無視することもあるが、その中核となる考え方や思想について上澄みを掬う形で自在に操っていることが解った。だが、ごく一部の断片的な関連を扱って両者の全体像が捉えられたか、はなはだ疑問ではある。というのも、『釣魚大全』には古今東西の様々な知識や考え方が夥しく鋳められているだけでなく、しかもそれらが出典を明示されず引用される場合があり、古典の伝統を広く眺めると同時に、微細な照合なくしては典拠の解明は不可能と思われる。

人類共通の普遍的な考えは現れては消え、また類似する考えを持った頭の中に受け継がれ、姿や形を変えつつも人の共感を呼ぶ。時の経過とともに、つまりその変遷の過程で、使い方次第ではクリシェになる可能性もあることも事実だ。けれど、それを行なって如何ほど得をするかと問われる世の中であって、普遍的な価値を持った名言「徳はそれ自体報酬」は、打算的な行為を払拭するほど現世の警句となろう。

## 註

- 1) 変色する動物の表象については、山根正弘「ドルフィンという名の魚——ジョージ・ハーバートと変色のエンブレム」、植月恵一郎（編著）『博物誌の文化学——動物篇』（鷹書房弓プレス、2003年）所収、101-15頁を参照。
- 2) 『釣魚大全』の引用は、第5版による。Izaak Walton, *The Compleat Angler*, ed. Jonquil Bevan (Oxford: Clarendon Press, 1983), pp. 222-23. なお、以後本文中では、Walton と略しページ数を付す。
- 3) 邦訳は、飯田操訳『完訳 釣魚大全（Ⅰ）』（平凡社ライブラリー、1997年）を参照したが、訳文は必ずしも一致しない。なお、セネカの『自然研究』は、1614年にトマス・ロッジ (Thomas Lodge, c. 1558-1625) による英訳『セネカの道徳および自然に関する著作』（*The Workes, both Morral and Natural, of Lucius Annaeus Seneca*）がある。岡倉由三郎（編註）*The Compleat Angler*, 研究社英文学叢書・復刻版（1926年；研究社、1982年）250頁。Gilbert Highet, *The Classical Tradition: Greek and Roman Influences on Western Literature* (1949; rpt. New York: Oxford University Press, 1985), p. 120. (ギルバート・ハリエット『西洋文学における古典の伝統 [上]』柳沼重剛訳、全2冊 [筑摩叢書、1969年/1985年] 125頁)
- 4) セネカ『自然論集（Ⅰ）』土屋睦廣訳、『セネカ哲学全集（3）』全7冊（岩波書店、2005-2006年）所収、153-54頁。
- 5) *Seneca: in ten volumes*, vol. 7 of *Naturales Quaestiones (I)*, trans. Thomas H. Corcoran (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1971), p. 241.
- 6) セネカ、前掲書、154-55頁。
- 7) Pliny, *Natural History*, vol. 3 of *bks. 8-II*, 2nd edn., trans. H. Rackham (1940; Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1983, 1997), p. 207.
- 8) アテナイオス『食卓の賢人たち（Ⅰ）』柳沼重剛訳、全5冊（京都大学学術出版会、1997-2004年）26-28頁参照。
- 9) モンテーニュ『エッセー（二）』原二郎訳、全6冊（岩波文庫、1965-1967年/1986年）163頁。
- 10) 曾村充利『ウォルトン小伝』、『釣り師と文学 アイザック・ウォルトン研究』（聖公会出版、2010年）所収、3-46頁。
- 11) Jonquil Bevan, Commentary to *The Compleat Angler*, *op. cit.*, p. 389; John Buchan, Notes to

*The Compleat Angler* by Izaak Walton and Charles Cotton (Oxford: Oxford University Press, 1982, 2008), p. 340.

- 12) ウォルトンの「騙しのテクニック」については、山根正弘「田舎牧師とその妻——ベマトンのジョージ・ハーバートと天使」、曾村充利（監修）『英文学と結婚——シェイクスピアからシリトーまで』（彩流社、2004年）所収、130-57頁、特に139頁を参照。
- 13) セネカ『幸福な生について』、『生の短さについて 他二篇』大西英文訳（岩波文庫、2010/2012年）所収、155頁。
- 14) アテナイオス『食卓の賢人たち（3）』前掲、68-69頁。
- 15) ペテロニウス『サテュリコン』国原吉之助訳（岩波文庫、1991/1996年）58頁。訳文では、「ひめじ」（比売知）という和名が使われている。青柳正規『トリマルキオの饗宴』（中公新書、1997年）98頁参照。なお、岩崎良三訳『サテュリコン』では単に「鱈」と訳されている。（『古代文学集』世界文学大系64 [筑摩書房、1961年]所収、292頁）。ロウブ古典叢書では、“two mullets”となっている。（*Petronius, Seneca, Apocolocyntosis*, trans. Michael Heseltine and W.H.D. Rouse [1913; Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1969, 1975], p. 63.）
- 16) セネカ『倫理書簡集（Ⅱ）』大芝芳弘訳、『セネカ哲学全集（6）』前掲所収、186-87頁。
- 17) 大芝芳弘訳、同書註、197頁。
- 18) Pliny, *op. cit.*, pp. 207-09.
- 19) John Buchan, Notes to *The Compleat Angler*, *op. cit.*, p. 334.
- 20) アラトス、ニカンドロス、オッピアノス『ギリシア教訓叙事詩』伊藤照夫訳（京都大学学術出版会、2007年）390頁。なお、アテナイオスは「ギリシアのオッピアノス・・・叙事詩で漁獲について書いた人・・・」（第1巻）と言っている。（『食卓の賢人たち（Ⅰ）』前掲、47頁）
- 21) アリストテレス『動物誌（下）』島崎三郎訳、全2冊（岩波文庫、1998-1999年）54頁。なお、ロウブ古典叢書では「グレイ・マレット」（“Grey Mullets”）と英訳されている。（*Oppian, Colluthus and Tryphiodorus*, trans. A.W. Mair [Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1928/1963], p. 213）
- 22) アリストテレス『動物誌（上）』前掲、206頁。
- 23) Jonquil Bevan, Commentary to *The Compleat Angler*, *op. cit.*, p. 383.
- 24) Morris Palmer Tilley, comp., *A Dictionary of the Proverbs in England in the Sixteenth and Seventeenth Centuries* (1950; rpt. New York: AMS Press, 1984), p. 389.
- 25) Montaigne, *Les Essais*, ed. Jean Balsamo, et. al. (1595; Paris: Gallimard, 2007), pp. 473-74.
- 26) モンテーニュ『エッセー（三）』前掲、35頁。
- 27) *Montaigne's Essays*, trans. John Florio, 3 vols. (1603; rpt. London: Dent, 1980), II, 142.
- 28) *The Essays of Michel Eyquem de Montaigne*, trans. Charles Cotton (1685; Chicago: William Benton, 1952/1971), p. 215.
- 29) Jacob Feis, *Shakspere and Montaigne* (1884; rpt. New York: AMS Press, 1970); John F. Robertson, *Montaigne and Shakespeare* (1897; rpt. New York, Haskell House: 1968); George Coffin Taylor, *Shakespeare's Debt to Montaigne* (1925; rpt. New York: Phaeton Press, 1968) and Tetsuo Anzai, *Shakespeare and Montaigne Reconsidered* (Tokyo: The Renaissance Institute, 1986).
- 30) セネカ『幸福な生について』、前掲所収、152頁。



- 31) セネカ、同書、152頁。
- 32) *Seneca: in ten volumes*, vol. 2 of *Moral Essays (II)*, trans. John W. Basore (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1932/1979), p. 123.
- 33) セネカ『恩恵について』小川正廣訳、『セネカ哲学全集(2)』前掲所収、170頁、292頁、302頁、319頁。
- 34) *Silius Italicus (II)*, trans. J.D. Duff (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1934/1968), pp. 252-53.
- 35) *Claudian (I)*, trans. Maurice Platnauer (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1922, 1976), pp. 338-39. なお、クラウディアヌスの後代に与えた影響については、E.R. クルツイウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』南大路振一、他訳(みすず書房、1971/1985年)特に、451頁；C.S. ルイス『廃棄された宇宙像』小野功生・永田康昭訳(八坂書房、2003年)特に、63頁を参照。
- 36) 『エセー(四)』前掲、52頁。原文では、“Recte facti, fecisse merces est. . . les actions de la vertu, elles sont trop nobles d’elles mesmes, pour rechercher autre loyer, que de leur propre valeur.” (Montaigne, *Les Essais*, *op. cit.*, p. 667) フローリオの英訳では、“Recte facti, fecisse merces est. . . (Seneca. *Epist. lxxxi*) the actions of virtue are themselves too-too noble, to seek any other reward, then by their own worth and merit.” (John Florio [trans.], *op. cit.*, II, 353)
- 37) セネカ『倫理書簡集(II)』前掲、8頁。
- 38) Sir Thomas Browne, *Religio Medici, Hydriotaphia, and The Garden of Cyrus*, ed. Robin Robbins (1972; corr. rpt. Oxford: Clarendon Press, 1982), pp. 49-50. サー・トマス・ブラウン『医師の信仰』堀大司訳、『世界人生論集(4)』(筑摩書房、1963年)所収、246頁参照。
- 39) ブラウン自身による欄外の註(『医者宗教』第1部第21節)によると、「セネカの三行」とは、悲劇『トロイアの女たち』(*Troades*)の台詞。トロイア陥落後、ギリシアの将軍たちは戦利品となる女たちを簍で引く。最大の功労者アキレスは、戦禍の種ヘレンの夫パリスによってすでに殺されたため、無視される。収まりのつかぬアキレスは霊となり、要求を呑むまではギリシア軍を港から出帆させぬと脅す。トロイアの王女ポリュクセナを死の花嫁として犠牲に要求する。合唱隊が死者の霊にそのような力があるのかと、問いかける。
- 死後には何も存在しない。死すらも無。(397行)
- 死は不可分のもの。肉体を滅ぼすと同時に／魂にも容赦しない。(401-02行)
- 私たちの死は一切のものに及び、私たちの一片として残るところは／ない・・・(378-79行)
- 高橋宏幸訳『トロイアの女たち』、セネカ『悲劇集(1)』(京都大学学術出版会、1997年)所収、126-27頁。
- 40) 山根正弘「モグラとスペンサー——モールの山と川、そしてアレトゥーサの泉——」創価大学英文学会編『英語英文学研究』第61号(2007年9月)101-18頁を参照。
- 41) M.P. Tilley, *A Dictionary of the Proverbs in England in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, *op. cit.*, pp. 699-700; *The Oxford Dictionary of English Proverbs*, 3rd edn. rev. F.P. Wilson (Oxford: Clarendon Press, 1970), p. 861.
- 42) William Shakespeare, *Macbeth*, ed. Kenneth Muir (London: Methuen, 1962, 1979), pp. 23-24.
- 43) Edmund Spenser, *The Faerie Queene*, ed. A.C. Hamilton, 2nd edn. (Harlow, UK: Pearson, 2001, 2007), p. 404.
- 44) “Thus he liv’d, and thus he dy’d like a Saint, unspotted of the World, full of Alms-deeds, full of

Humility, and all the examples of a virtuous life. . .” (Izaak Walton, *The Lives of John Donne, Sir Henry Wotton, Richard Hooker, George Herbert and Robert Sanderson*, ed. George Saintsbury [London: Oxford University Press, 1927], p. 319)

- 45) *The Works of George Herbert*, ed. F.E. Hutchinson (1941; corr. rpt. Oxford: Clarendon Press, 1945), pp. 243-44.
- 46) ハーバートの決議論については、Camille Wells Slight, *The Casuistical Tradition in Shakespeare, Donne, Herbert, and Milton* (New Jersey: Princeton University Press, 1981), esp. pp. 183-246を参照。